

すみだ史談

第54号

旧水路研究ノート

六間堀はいつ誕生したか②

—追跡・六間堀「源流」—

旧水路ラボ

一はじめ

前号では、六間堀が万治年間（一六六〇年頃）に開削されたとする説にいくつも

の疑義があり、六間堀の誕生はそれよりも遡る可能性が高いことを指摘しました。本稿では、六間堀の誕生について、さらに考察を進めたいと思います。

二六間堀誕生の経緯

六間堀はいつ、どのように誕生したのでしょうか。六間堀の存在が確認できる一次史料としては、寛文一一（一六七一）年の

ます。

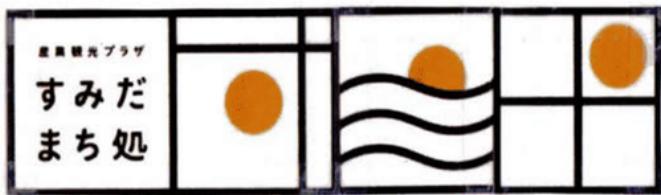
ため、誕生の経緯を検討するにあたっては、間接的な証拠を積み上げていく必要があります。

（二）古道 その一つが、古い道路です。

寛文五枚図に描かれた、六間堀付近の蛇行した古道を見ると、六間堀開削によつて分断されたと認められるものは一つもありません。このことは、集落が発達する前から

六間堀（あるいはその前身の水路）があつたことを窺わせます（図の赤円の部分。前号も参照）。

次ページへ



すみだの産業、文化、歴史、観光、グルメ情報
東京スカイツリー土産
産業観光プラザ すみだまち処

開始時間：10:00～21:00

年中無休 TEL 03-6796-6341

前ページより

(二) 書上 『町方書上』の記述も手掛かりになるかもしれません。この「深川海辺大工町」の項には、慶長元(一五九六年)に深川村分郷六間堀が成立したと書かれている一方、「深川六間堀町」の項には、水路としての六間堀がいつできましたのか分からないとあります。両項は、同一人物(代々続く付近一帯の名主、八左衛門)が同じタイミングで書いたもので、基本的にその内容に齟齬はないといえられます。そこで、二つの内容を合わせ読むと、六間堀(集落)が成立する以前から六間堀(水路)は存在したという可能性が浮かび上がります。入植時点で既に水路があったとすれば、その成立年が分からるのは当然です(なお、同書「両国橋御役船」の項も参照)。

(三) 位置・方向・形状 その特徴的な流路も示唆的です。隅田川沿いにあつた墨田区内の水路のうち、片葉堀・御蔵堀・梅堀・奴堀などは、隅田川から垂直方向に掘られていました。それに対して六間堀は、隅田川の至近を、隅田川に並行して、隅田川の湾曲に沿うように流れていました。しかし、わざわざそのような流路にする必要性に乏しく、そこに計

画性を見出すことは困難です。流路の特徴が似ている梅若堀(浦ノ川・内川)は、本来自然河川だったといわれています。

六間堀も同様に、河川の流路変化の中で生まれたのではないでしようか。

以上の諸点から、六間堀は人工的につくられた水路ではなく、安土桃山時代以前に自然の営力によってできた古い水路である可能性が高いと考えられます。

元々、隅田川の川幅が六間堀の辺りまで砂洲との間の水辺があり、隅田川東岸と、その近くにできた砂洲との間の水辺が、六間堀のルーツなのでしょう。そこに目をつけた深川八郎

右衛門のような開拓者が、流路を整えていた——このように考えると、上記の諸点を整合的に説明できるのです。

三・豎川以北の「六間堀」

ところで、六間堀の元となる水路の成立が万治より前であるならば、ある疑問が浮かびます。万治年間の豎川開削より前の時期に、六間堀の上流部はどうなっていたのか、という疑問です。

これについても確実なことは分かりません。しかし、手掛かりがないわけではありません。一つが、亀沢池です。この池は現在の両国小学校・両国公園の辺りにあつた大池で、『葛西志』によれば江戸時代を通じて徐々に埋められていました。この亀沢池のすぐ南が六間

堀という位置関係から、両者は豎川疎通の地図に見られる本所御蔵敷地の不自然な区割りです。亀沢池の北の辺りだけが、斜めに切り落とされたかのような形になっていました。そしてこの斜めの方向は、隅田川の流路の向きとほぼ一致していました。この部分が元は水路だったという直接の証拠はありませんが、六間堀の流路がこの辺りまで伸びていたとしても不思議ではありません。

四・おわりに

六間堀にあたる水路は、一六世紀までに形成された隅田川の名残であり、古くはその上流が本所の中央付近にまで達していた可能性があるというのが現時点での結論です。なお、上流部と同様、下流部についても、小名木川の開削前後で姿が変わった可能性は十分あります。



夢を夢で終わらせない信用金庫

東京東信用金庫